

研究ノート

長崎国際大学スポーツ系部活動・サークルに所属する
学生の現状とニーズの研究

元 嶋 葉美香^{1)*}, 宮 本 彩²⁾, 神 野 周太郎¹⁾,
宮 良 俊行¹⁾, 宮 原 恵子³⁾, 熊 谷 賢哉¹⁾

¹⁾長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科、²⁾環太平洋大学、
³⁾長崎国際大学 健康管理学部 健康栄養学科、*連絡対応著者)

The Study of Current Conditions and Needs of students belonging to
the Nagasaki International University Sports Club

Namika MOTOSHIMA^{1)*}, Shutaro JINNO¹⁾, Aya MIYAMOTO²⁾,
Toshiyuki MIYARA¹⁾, Keiko MIYAHARA³⁾ and Kenya KUMAGAI¹⁾

¹⁾Department of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies, Nagasaki
International University, ²⁾International Pacific University, ³⁾Department of Health and
Nutrition, Faculty of Health Management, Nagasaki International University,
*Corresponding author)

Abstract

Nagasaki International University has 12 strength-designated clubs, 8 athletic clubs and 11 sports clubs, and a diverse and large number of students in the university. In this study, as a basic survey for improving the competitiveness of university club activities, we investigated the needs of students and examined the support such as training and training session that sports students demand from the university.

The results showed that more than 90% of the members of the designated strength clubs were engaged in club activities four or more days a week on weekdays. The results of the needs assessment showed that many respondents wanted to engage in physical training (16.3%) and conditioning (12.4%) in order to improve their level of performance, as well as seeking courses and information on physical training (12.4%), psychological training (10.4%) and conditioning. As for what they would like to see from the university, a number of comments were received from intensely designated and athletic clubs that spend a very large amount of time in clubs compared to the less active athletic clubs, indicating the need to consider specific support for student needs.

Key words

University Student, Sports Club, Support

要 旨

長崎国際大学では、強化指定部12団体・運動部8団体、体育系サークル11団体と多様かつ多数の学生が所属している。本研究では、大学部活動の競技力向上のための基礎調査として、学生のニーズについて調査を行い、スポーツ系学生が大学に求めるトレーニングや講習などのサポートについて検討した。

活動状況について、強化指定部は活動日数や休日の活動時間が他に比べ多く、特に強化指定部においては平日のうち週4日以上部活動を行っている者が9割以上であることが示された。また、ニーズ調査の結果、レベルアップのために身体的トレーニング(16.3%)やコンディショニング(12.4%)に取り組みたいこと、身体的トレーニング(12.4%)や心理的トレーニング(10.4%)、コンディショニングなどの講習や情報を求める回答が多かった。大学に望むこととして、活動頻度の低い体育系サークルに比べ、非常に多くの時間を部活動に費やしている強化指定部や運動部から多くの意見が得られ、学生のニーズに対する具体的支援を検討する必要性が示された。

キーワード

大学生、運動部活動、支援

1. はじめに

1.1 大学生の多様化

急激な少子化にともない18歳人口が減少する一方で、令和元年度の高等教育機関進学率は82.8%（前年度より1.3ポイント上昇）で、大学（学部）進学率は53.7%（前年度より0.4ポイント上昇）で過去最高の進学率となった（文部科学省，2020）。このような進学率の背景には、多様な入試方法（坂元，1998）や推薦入試・AO入試による入学者の増加（旺文社教育情報センター，2018）、スポーツ推薦制度の確立（小野他，2017）が関係していると考えられる。望めば必ずどこかの大学に入学できてしまう「大学全入時代」・「大学のユニバーサル化」と呼ばれ、学力や背景の多様化によって教育活動が困難になること、学習に対するモチベーションが低い学生が増加することなどが指摘されている（辻，2010）。

長崎国際大学ではスポーツ推薦制度やスポーツAO制度を利用し、毎年多くの学生が入学している。令和元年度5月1日時点で、強化指定部12団体・運動部8団体、体育系サークル11団体が大学の公式団体として活動しており、在籍学生2,275人のうちこれらの部活動の登録部員数は延べ876名にのぼる。多くの部活動で継続的に全国・九州レベルの高い競技成績を残し、過去には世界規模の競技会に出場する学生もみられるなど、非常に高いレベルで競技に取り組んでいる。

1.2 スポーツ系部活動・サークルの定義

大学におけるスポーツ活動について、文部科学省（2017）は「大学の教育課程としての体育、学園体系としてのスポーツ科学、課外活動（部活動、サークル活動、ボランティア）等の側面があり、各活動には、身体能力を高める、健康的生活をデザインする、豊かな生活を送る等の様々な効用がある」とし、スポーツ系の部活動・サークル活動を意義ある課外活動として定義している。

その活動形態はさまざまであり、「大学公認

の体育会」に所属する団体を「体育会運動部」、体育会には所属していない団体を「体育系サークル」、体育会運動部と体育系サークルを合わせたものを「体育会系」とした研究（金森・蛭田，2018）や「大学生活における長期的かつ非営利的な正課外活動を目的として、大学生が主たる構成員として自主的に運営ならびに活動をする集団」を「サークル集団」とした研究（高田，2017）など様々な定義がみられる。また、その他にも大学の非公認団体に所属し活動する学生や、地域の社会人スポーツクラブに所属する学生など、多様な目的・活動形態でスポーツに取り組む学生がみられる。本研究では先行研究および長崎国際大学内規（2015a・2015b）に則り、専任教職員もしくは学長の認める学外指導者が監督として責任をもって指導すること、競技成績として九州大会優勝以上を目標とし、達成することが期待できることなどの事項を満たすと大学に公認されている団体を「強化指定部」、大学公認であり、継続的に活動し成果を上げている団体のうち、体育系の種目を実施しているものを「運動部」、大学公認であり継続的に活動している団体のうち、体育系の種目を実施しているものを「体育系サークル」、強化指定部・運動部・体育系サークルに所属している学生を「スポーツ系学生」と定義する。

1.3 スポーツ系部活動・サークルの実態

スポーツ系部活動やサークルの実態について、多くの大学で実態・意識調査が行われている（新井・松井，2003）。

先行研究では、入団動機（蔵本・菊池，2006；高田，2017）、競技スポーツ組織の現状（井上他，2001）、スポーツ環境に対する満足度（西川他，2014）など、調査対象によって非常に多様な実態・ニーズがあることを示している。

一方で、大学生を対象とした大学生の学習・生活実態調査では、「アルバイト」や「サークルや部活動」、「社会活動（ボランティア、NPO活動などを含む）」などの正課外活動への参画

が増加していること、大学で力をいれたものとして「趣味」「アルバイト」などの大学外のプライベートな活動を除くと、「サークル・部活動」が「大学の授業」に次ぐ重要な要素であることが明らかとなった（ベネッセ教育総合研究所，2018，2013）。また、大学生生活満足感尺度に「サークル・部活動」が含まれること（堀，2015）、課外活動に参加している学生の方が参加していない学生に比べ学生生活満足度が高いこと（一般社団法人日本私立大学連盟，2018）、大学生の部活・サークルへの所属と活動に対する意識が学校生活満足度に与える影響が明らかになっていること（安達・杉山，2019）から、特にスポーツ推薦制度やスポーツ AO 制度などを活用したスポーツ系学生にとって、部活動の満足感は学生生活満足感に強く影響することが推測される。

1.4 NIUS 設立および調査の経緯

熊谷他（2019）は、長崎国際大学のスポーツ系部活動に対する大学の関与の在り方が大きく異なり、全体での一体性を有していないことを指摘し、①本学のスポーツ分野を NIU スポーツブランド（通称“NIUS”）として一体化すること、②NIUSを統轄する部署（NIUS サポートセンター）の設立に向けた取組を行うことを目的とし、「長崎国際大学スポーツブランド“NIUS”醸成に向けた取り組み」（平成30年度学長裁量経費受託事業）を実施した。また、平成31年度には、学生アスリートへのサポート（競技力向上支援、運営支援、学習支援、キャリア支援）やスポーツイベント支援の促進・定着化を目的とし、『NIUS 支援センター』の組織体制およびその業務の確立」（平成31年度学長裁量経費受託事業）に取り組んだ。

大学教育のユニバーサル化に伴う学生の多様化は課外活動の多様化にもつながり、学生の状況を把握し支援を行う必要性が示唆されている（全国大学体育連合，2014）。多様な学生が多様な目的・形態でスポーツに参画している長崎国

際大学において、スポーツ系学生の競技力向上や学生支援のために全学的な実態調査を行い、ニーズを明らかにすることは重要であると考えられる。

1.5 本研究の目的・意義

本研究では、大学全体の競技力向上のための基礎調査として、長崎国際大学スポーツ系学生の実態およびニーズについて調査を行い、スポーツ系学生が大学に求めるトレーニングや講習などのサポートについて検討することを目的とした。学生の実態およびニーズが明らかになることによって、学生の満足度につながる要因を明らかにし、現在行っているサポートの改善・向上に向けた基礎的知見が得られると考えられる。

2. 方法

(1) 対象

令和元年度時の強化指定部12団体・運動部8団体、体育系サークル11団体に所属する学生（登録部員数延べ856名／主登録797名）を対象とした。

(2) 実施時期

令和元年11月11日～12月31日に web ポートフォリオ（manaba）でアンケート調査を行った。調査協力の依頼として、マナバおよび各部活動・サークルの代表者が集う代表者会議にて、調査趣旨の説明および調査協力依頼を行った。

(3) 調査内容

実態調査：基本属性として、学科、学年、所属している部活動・サークル名、活動状況（平日・休日の平均活動回数・活動時間）、継続年数を求めた。

また、部活動・サークル以外に個人で行っている活動について、「①競技能力の測定（例：試合以外でタイム、球速、点取り、バット数などの測定）」、「②身体的トレーニング（例：筋力トレーニング、走り込みなど）」、「③技術的トレ

ニング(例:ピッチング、バッティング、形稽古など)、「④心理的トレーニング(例:メンタルトレーニング、心理測定、メンタルトレーナーとの面談など)」、「⑤コンディショニング(例:ストレッチ、アイシング、体重管理、食事管理、血液検査など)」、「⑥その他」の6項目に対して実施の有無を問い、実施している場合は具体的な内容の記述を求めた。

ニーズ調査:部活・サークルや個人で取り入れたいことについて上記の①～⑥の項目に対して複数選択で回答を求め、具体的な希望がある場合は具体的な内容の記述を求めた。また、部活動・サークル継続やレベルアップのために、受けたい講習や知りたい情報について、上記の①～⑤に加え、⑥組織管理、⑦その他を選択肢とし、具体的な希望がある場合は具体的な内容の記述を求めた。最後に、部活動・サークル継続やレベルアップのために大学に望むことについて自由記述で回答を求めた。

(4) 倫理的配慮

マナバおよび代表者会議にて、文章および口頭で本調査の趣旨および大学への提言として使用することを説明し、アンケート調査の協力を求め、回答をもって同意を得たものとした。

(5) 分析方法

797名のスポーツ系学生のうち、254名(31.9%)から回答を得た(表1)。所属している部活動・サークルに関して、「その他」として本学の公認団体には含まれていないスポーツを個人で行っているとの回答が得られ、部活動やサークル以

外にも積極的にスポーツに関与している学生が在籍していることが示された。なお、平均値の算出等の量的分析は「不明」「その他」の3名を除いた251名を対象とした。自由記述に関しては誤字などを考慮しつつ、すべての記述を分析対象とした。

アンケート結果の単純統計(回答数・回答率・平均値・標準偏差)を算出し、自由記述の分類およびテキストマイニングの手法としてKHcoderを用いた頻出語の抽出を行った。

3. 結果および考察

3.1 実態調査

活動状況について、強化指定部、運動部、体育系サークルで異なり、強化指定部は活動日数や休日の活動時間が他に比べ多く、特に強化指定部においては平日のうち週4日以上部活動を行っている者が9割以上であることが示された(表2、図1～4)。この結果は、部活動の活動時間と学習時間の関係を指摘した本学の学習状況調査(古賀他, 2019)を支持する結果といえ、多くのスポーツ系学生が多くの時間を部活動に充てていることが明らかとなった。

表1 回答状況

	登録者数 (名)	回答者数 (名)	回答率
強化指定部	355	150	42.30%
運動部	116	47	40.50%
体育系サークル	326	54	16.60%
不明		2	
その他		1	
合計	797	254	31.90%

表2 活動状況

	総計 (n=251)	強化指定部 (n=150)	運動部 (n=47)	体育系サークル (n=54)
平日活動日数 (日)	3.6±1.6	4.5±0.9	2.4±1.4	2.1±1.6
平日活動時間 (時間)	2.6±0.7	2.8±0.6	2.5±0.6	1.8±0.5
休日活動日数 (日)	1.3±0.6	1.4±0.5	1.2±0.7	0.8±1.1
休日活動時間 (時間)	4.2±3.1	4.8±3.0	3.5±3.2	1.5±1.4
経験年数 (年)	7.9±4.7	9.7±3.9	6.4±4.5	4.1±4.3

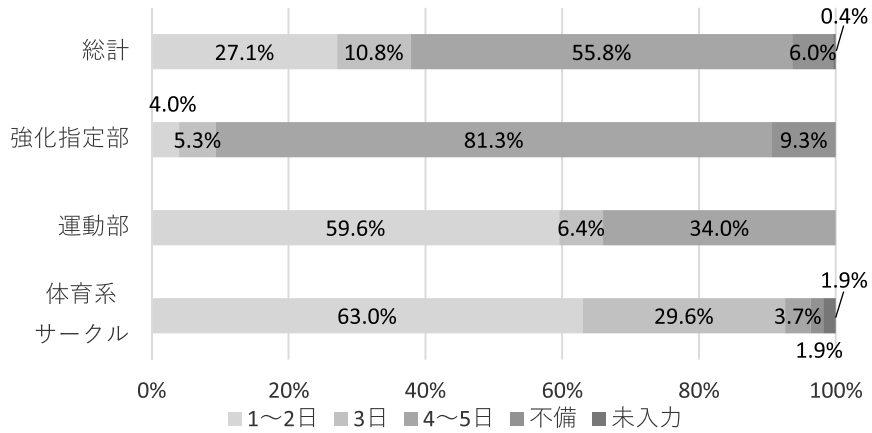


図1 平日の活動日数

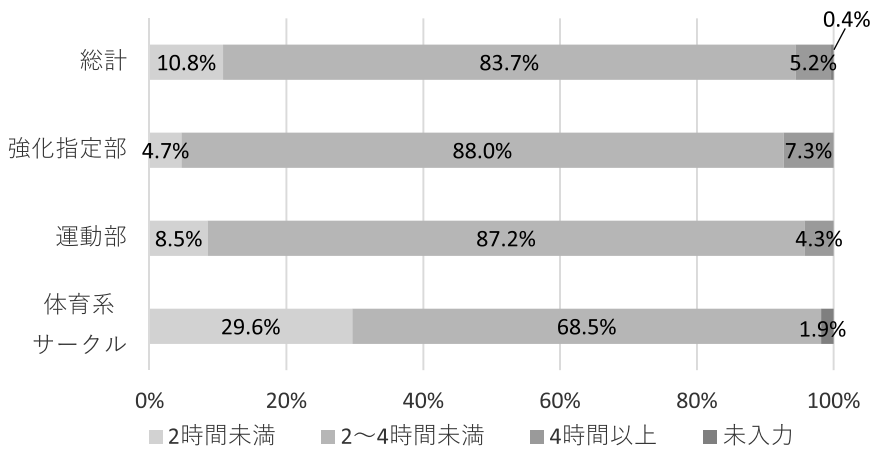


図2 平日の活動時間

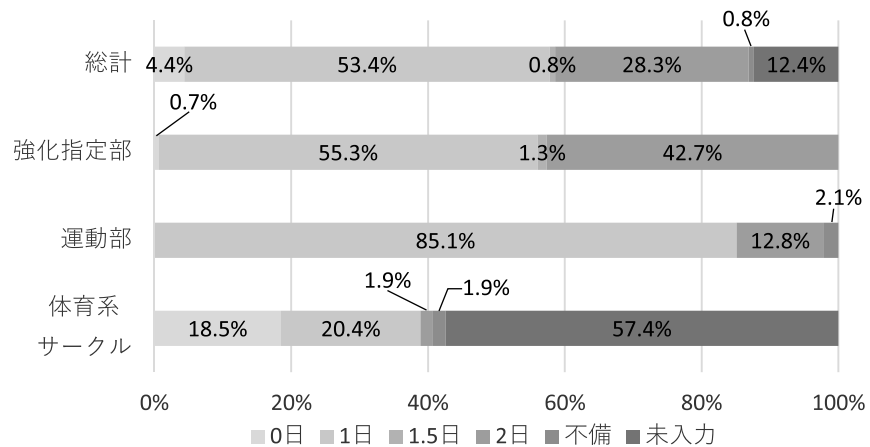


図3 休日の活動日数

また、経験年数は体育系サークル、運動部、強化指定部の順で長かった(表2、図5)。30.3%の学生が12年以上継続しており、高い専門性と競技力を有していることがうかがえる。

競技能力向上のため、部活動やサークルの時間以外に個人で行っていることに関して、強化指定部に所属する学生が最も多くの内容に取り組んでいた。スポーツ系学生の実施内容として、身体的トレーニング(実施率57.8%・図7)、コンディショニング(実施率51.8%・図10)、技術的トレーニング(実施率45.0%・図8)、競技能

力の測定(実施率15.9%・図6)、心理的トレーニング(実施率6.0%・図9)の順で実施率が高く、明らかに競技能力の測定および心理的トレーニングの実施率が低いことが示された。

それぞれの実施内容として、競技能力の測定では点取り・ベースランニング・体力測定など37件、身体トレーニングでは筋力(ウェイト)トレーニング、エアロバイク、ランニングなど142件、技術トレーニングでは素振り、社会人チームへの参加、フォームの確認など107件、心理トレーニングではメンタルトレーニング、セル

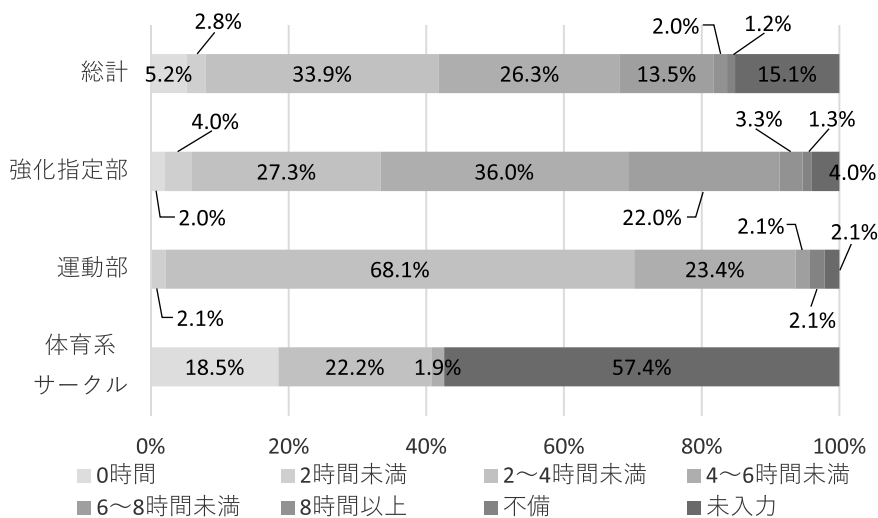


図4 休日の活動時間

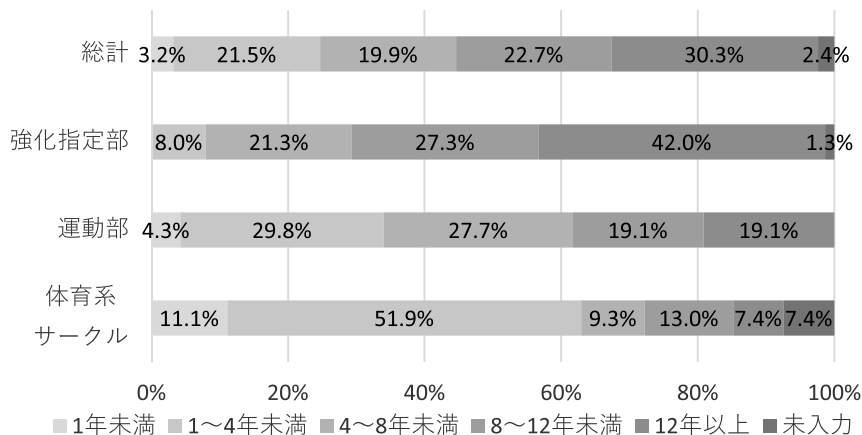


図5 現在行っている競技の経験年数

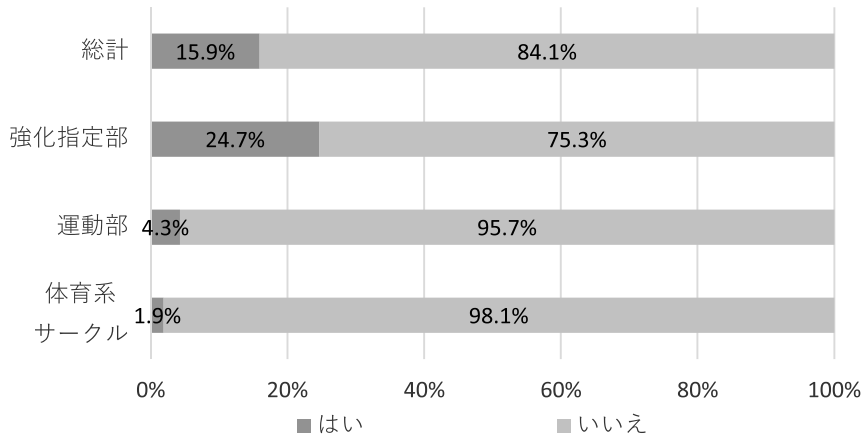


図6 競技能力測定の実施状況

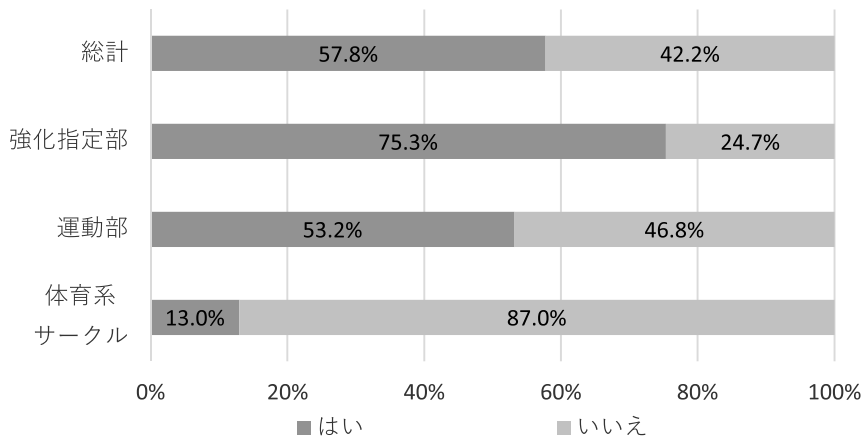


図7 身体的トレーニングの実施状況

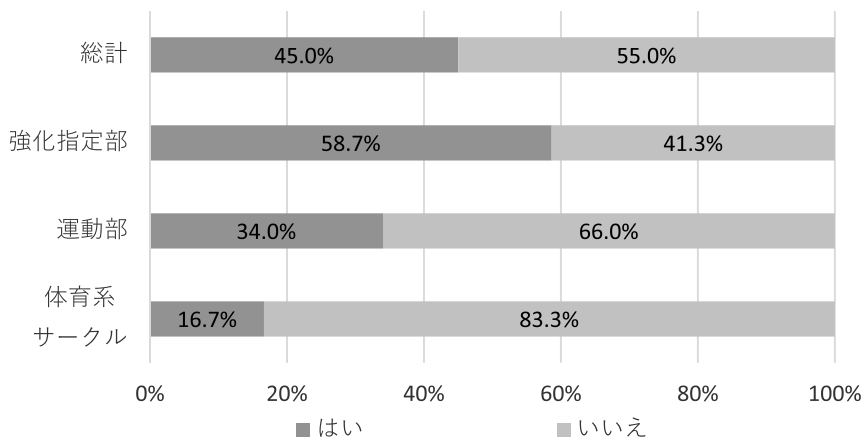


図8 技術的トレーニングの実施状況

フトレニング、関係する本を読むなど14件、コンディショニングではストレッチ、アイシング、体重管理など126件の具体的記述が挙げられ、特に多くの部活動の学生が身体的トレーニングやコンディショニングを重点的に行っていることが示された。

個人の技能や心理状態がパフォーマンス結果に直結し、かつ可視化しやすい個人種目と異なり、集団種目においては技能力の測定や心理的トレーニングは個人で実施しづらい。部活動においてメンタルトレーニングを導入している中学校・高校は増えているものの、部活動の担当教員の多くが専門的な資格を有していないと推

測されることから（公益財団法人日本体育協会，2014）、専属のスポーツメンタルトレーニング指導士を有していない場合、身体的トレーニングや技術的トレーニングに比べ心理的トレーニングを個人で実施するだけの知識を有していないことが実施率の低さにつながっていると推測される。また、身体的トレーニングやコンディショニングであれば大学のスポーツ施設や近隣のスポーツクラブ、また個人の自宅で実施することができるが、集団種目において競技能力を測定する機材が不足しているために個人では実施できないと推測される。

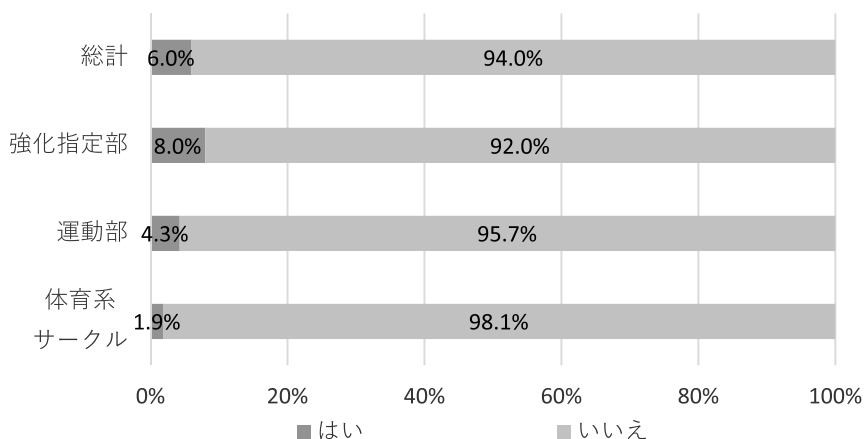


図9 心理的トレーニングの実施状況

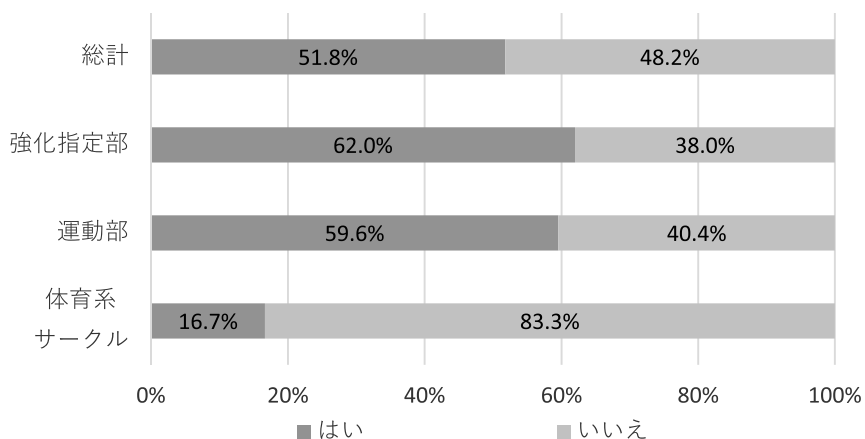


図10 コンディショニングの実施状況

3.2 ニーズ調査

レベルアップのために、部活動やサークル、個人で取り入れたいことに関して、全体として身体的トレーニング（16.3%）やコンディショニング（12.4%）を求める回答が多かった（図11）。身体的トレーニングは実態調査のなかでも最も実施率が高い内容であったが、レベルアップのためにさらに実施したいと考えているスポーツ系学生が多いことが明らかとなった。一方、特になしと答える者は強化指定部や運動部で約32～33%、体育系サークルで約76%であり、スポーツへの取り組み方によってニーズが大きく異なることが示された。

自由記述のなかで出現回数が6回以上の頻出語上位10項目（表3）を見ると、身体トレーニング・心理トレーニングなどの「トレーニング」、

スピード測定・ジャンプ測定などの「測定」、練習環境の改善・練習時間の延長などの「練習」というワードが多く見られた。

98件の自由記述の内容を参照し分類した結果（表4）、「時期に応じて、タイム測定や筋力測定、スピードを測定し明確な数字として競技力向上に活かしたい」などの競技能力の測定に関する記述が5件、「ウエイトトレーニングやフィジカル系のトレーニングを行いたい」などの身体的トレーニングに関する記述が27件、「速い球を投げるための動作トレーニング」などの技術的トレーニングに関する記述が10件、「試合前のモチベーションの上げ方」など心理的トレーニングに関する記述が17件、「栄養指導、アイシングの基本的処置、テーピングの使用法」などのコンディショニングに関する記述が16件、

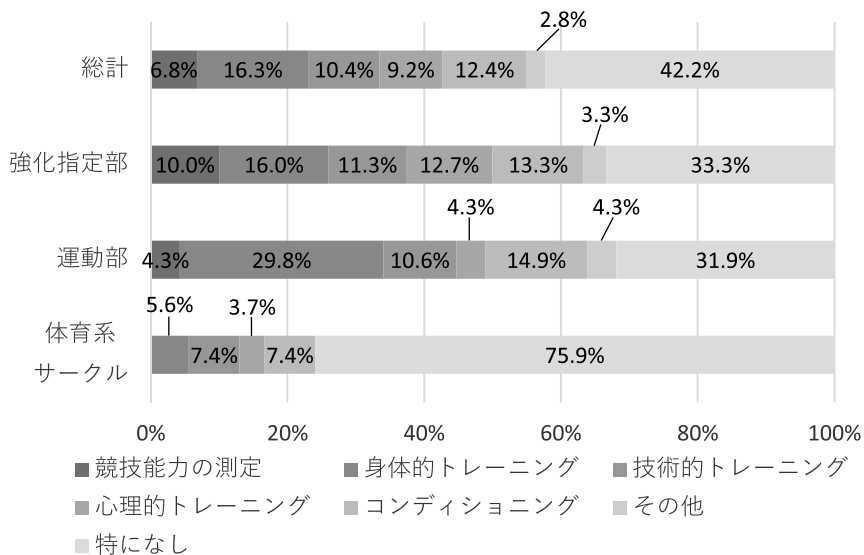


図11 レベルアップのために、部活動やサークル、個人で取り入れたいこと

表3 レベルアップのために、部活動やサークル、個人で取り入れたいこと（頻出語上位10項目）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
トレーニング	14	メンタルトレーニング	7
測定	11	行う	7
練習	10	ウエイトトレーニング	6
筋トレ	8	筋力トレーニング	6
メンタル	7	食事	6

その他として「身体的トレーニングを本格的に行いたいので、トレーニングルームの拡大を希望します」などの各種トレーニングを実施するための環境・施設の改善や機材の導入に関する記述が15件、「チームまたは大学にトレーナーがいればボディケアやトレーニングに専門知識を取り入れやすくなると思う」といった専門知識を有する指導者やスタッフの導入に関する記述が8件みられた。

次に、レベルアップのために、受けた講習や知りたい情報に関して、全体として身体的トレーニング(12.4%)や心理的トレーニング(10.4%)、コンディショニングを求める回答が多かった(図12)。一方、特になしと答える者は強化指定部や運動部で約40~41%、体育系サー

クルで約80%であり、講習会や情報に対するニーズはあまり高くないことが示された。

自由記述のなかで出現回数が5回以上の頻出語上位12項目(表5)を見ると、プロ選手等の講話・講習などの「選手」、メンタル・コンディショニングなどの「講習」、パフォーマンス向上のための「トレーニング」というワードが多く見られた。

72件の自由記述の内容を参照し分類した結果(表6)、「トレーニングがどんなパフォーマンスにつながるのか知りたい」などの身体的トレーニングに関する記述が14件、「バッチングの飛距離を伸ばすためにはどのようなトレーニングをすれば良いか」などの技術的トレーニングに関する記述が9件、「メンタルトレーニング

表4 レベルアップのために、部活動やサークル、個人で取り入れたいこと(記述内容を一部抜粋)

導入希望	具 体 例
競技能力の測定 (5件)	時期に応じて、タイム測定や筋力測定、スピードを測定し明確な数字として競技力向上に活かしたい。 ジャンプ測定、ステップスピード スポーツテスト
身体的トレーニング (27件)	体幹トレーニングや筋力トレーニング チームとして身体的トレーニングを効率よく増やしていく。 ボールを使ったトレーニング以外に、ウエイトトレーニングやフィジカル系のトレーニングを行いたい。
技術的トレーニング (10件)	シャドーピッチング 速い球を投げるための動作トレーニング 空手は競技と武道とで形の打ち方が変わってくるからその辺の使い分けが出来るようにこれから稽古していく。
心理的トレーニング (17件)	試合の時のメンタルコンディションの整え方 試合前のモチベーションの上げ方 試合で緊張しすぎて自分のパフォーマンスが出来ないことが多いから心理トレーニングを行いメンタルを強化する
コンディショニング (16件)	栄養指導、アイシングの基本的処置、テーピングの使用法 体重測定もだが、インボディで測定して具体的に足りない部分を知りたい 試合前の適切なアップ方法について・ストレッチ、身体のケアについて
その他/環境 (15件)	能力を測る機械等 身体的トレーニングを本格的に行いたいので、トレーニングルームの拡大を希望します。 練習用具の充実。台や外部体育館へ移動する際の移動手段の充実。
その他/指導者 (8件)	指導者がいるのだが、不在が多く、技術的な指導が学生同士の場合が多い。指導者の問題の改善。 アーチェリーはメンタルスポーツと言われるだけあり、競技に大きく影響します。日頃から定期的に専門の先生に教えてもらいたいです。 チームまたは大学にトレーナーがいればボディケアやトレーニングに専門知識を取り入れやすくなると思う。

の講習」など心理的トレーニングに関する記述が13件、「ケガをしている選手に対するケアの仕方の講習」などのコンディショニングに関する記述が19件、「人をまとめられるリーダー力」などの組織管理に関する記述が5件、その他として「プロバレーボール選手や全日本監督などを呼んで講習を受けたい」などのプロとして活躍している選手や監督などによる講習に関する記述が7件みられた。また、受けたい講習や知りたい情報ではないが、各種トレーニングを実施するための環境・施設の改善や機材の導入や専門知識を有する指導者やスタッフの導入に関する記述が5件みられた。

記述のなかには、「大学生活では食生活や生活リズムの乱れから競技力が向上しない人を多

く目にし、所属する部活動の学生で一定の競技力に満たない学生はその傾向が強かった。対して、競技力向上が見込めている学生に関してはコンディショニングに関する知識を有していたり、広めていこうとする傾向が見られるため、コンディショニングの重要性を説く講義はスポーツ栄養学のように2・3年時からではなく、入学してすぐ教えてもいい内容だと感じた」という授業の開講時期に関する要望も見られた。高い競技成績を求めるスポーツ系学生にとって、自身の競技能力の向上に関わる授業への関心の高さがうかがえる。高校生と比較して大学生は生活が不規則であり、特に一人暮らしの学生の食生活などの生活が乱れやすいことから(中山・藤岡, 2011)、特に入学後の食事や生活習慣に

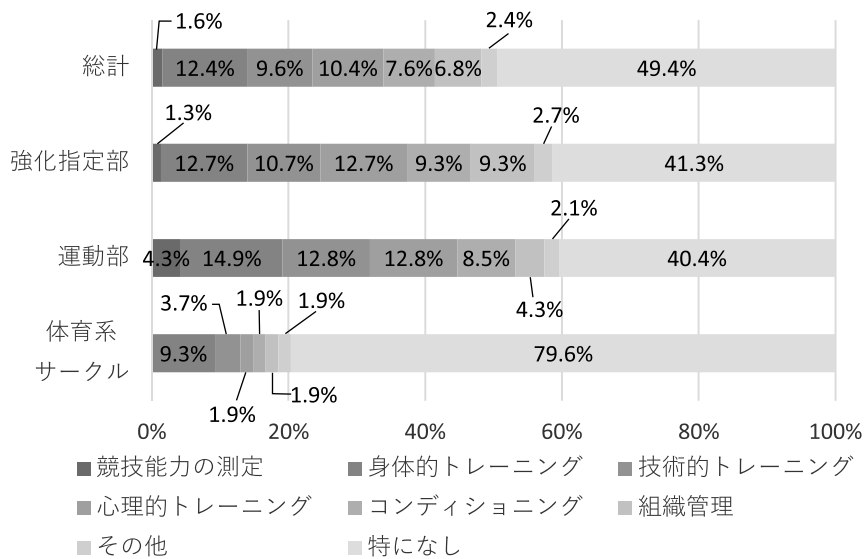


図12 レベルアップのために、受けたい講習や知りたい情報

表5 レベルアップのために、受けたい講習や知りたい情報(頻出語上位12項目)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
選手	10	チーム	5
講習	8	競技	5
トレーニング	7	向上	5
メンタル	6	試合前	5
人	6	食事	5
体	6	練習	5

関する講習が重要であると考えられる。

3.3 大学への要望

大学に望むこととして自由記述で回答した者は、体育系サークルでは約15%であったが、強化指定部や運動部では約45~50%であった(図13)。活動頻度の低い体育系サークルに比べ、非常に多くの時間を部活動に費やしている強化指定部や運動部から多くの意見が得られた。

自由記述のなかで出現回数が10回以上の頻出語上位10項目(表7)を見ると、練習環境の整備などの「練習」や「グラウンド」「体育館」「道場」、部活の支援・評価規準、部活上の問題などの「部活」などが見られた。

107件の自由記述の内容を参照し、環境(公共)・環境(個別)・指導者・休暇・金銭的支援・その他に分類した結果(表8)、「最新のマシンとトレーニング専用の建物を作って欲しい」「体育館が雨漏りしてるので治してほしいです」などの多くのスポーツ系学生や一般学生が使用するトレーニング施設や体育館、グラウンドなどの公共施設の充実・改善に関する記述が40件、「グラウンドの環境(ピッチやナイター設備、水道など)がもう少し充実すると、練習時間も多く取る事が可能になると思う」「練習に集中するためにも、室内で練習できる場所があったらいいなと思います」などの各種部活動やサークルが使用する施設や用具の充実・改善に関す

表6 レベルアップのために、受けたい講習や知りたい情報(自由記述を一部抜粋)

受けたい内容	具 体 例
身体的トレーニング (14件)	闇雲な根性メニューでは無く、科学的根拠のあるウォーミングアップやランメニュートレーニングメニューを作ってくださいようなアスレティックトレーナーの方を、呼んでチーム全体のフィジカル、競技力向上に繋がるような講習をして欲しい。 トレーニングがどんなパフォーマンスにつながるのか知りたい 部分別の筋力トレーニング
技術的トレーニング (9件)	高いレベルの指導を受けたい 技術講習、教室など バッティングの飛距離を伸ばすためにはどのようなトレーニングをすれば良いか メンタルトレーニングの講習
メンタルトレーニング (13件)	空手道部は、主に技術で負けるというより、試合の状況でのメンタル面で負けることが多い、よってメンタルトレーナーなど チームや選手のモチベーションを向上させるもの。
コンディショニング (19件)	ストレッチ、アイシング、テーピング、応急処置などの講習 試合前の食事 普段のアスリートの食事 試合前、後のケア ケガをしている選手に対するケアの仕方の講習。
組織管理(5件)	人をまとめられるリーダー力 団結力のレベルアップ方法 部活、1つのまとまりをどのようにしてまとめて同じ方向へ持っていきけるのか、持っていくべきなのか。
プロスポーツ選手の講話 (7件)	どのような練習方法でナショナルチーム選手は育成されていくのか、 プロバレーボール選手や全日本監督などを呼んで講習を受けたい 陸上選手によるデモンストレーションなど
その他/指導者・施設 (5件)	ちゃんとしたコーチ、監督が必要です。 これまで自分の、技術力は友達やYouTubeを通して自分の独学のもので。 チーム、そして個人の競技力向上するには、もっと知識や選手とちゃんと向き合ってくれる、コーチ監督が必要です。 トレーニングルームをつくる 環境の準備、道場を作って欲しいです。使える時間が限られてるので、時間に追われた練習しかできないし、場所が狭く、想定した練習ができない

る記述が41件、「指導者が来年いなくなるので、1人でもいいから欲しい」などの指導者の配置・改善に関する記述が10件、「遠征費や外部活動の費用を工面してほしい」などの金銭的支援・評価方法に関する記述が8件、「休みがほしい」などの休暇に関する記述が2件、その他として「もっと、大学の部活全体をホームページにあげ、知ってもらおう」など6件の記述がみられた。

西川他(2014)は、スポーツ環境に対する各項目の満足度について、クラブ要因(運動部・体育会系サークル)と競技種別要因(個人競技・集団競技)による二要因分散分析を行い、スポーツ施設・設備等に対する満足度について、集団競技において体育系サークル群に比べ運動部群が高く、運動部群において個人競技群に比べ集団競技群が高いことを明らかにした。この原因として、運動部群のスポーツ施設等は専用施設または優先的に使用できる施設を保有していること、体育系サークル群は主に大学体育施設を

借りて活動しており、多くの場合他の運動部などと施設を共有していることから練習時間の制限や用具の運び入れや準備などの時間を取られることを指摘している(西川他, 2014)。本研究においては個人競技・集団競技の区分は行っていないが、強化指定部であっても他の部活動とスポーツ施設を共用していることから、練習時間の制限や用具の不足などの不満が高まっていると推測される。さらに、長崎国際大学では、強化指定部12団体・運動部8団体、体育系サークル11団体が大学の公式団体として活動しており、各種部活動の使用する施設に関する要望が多く見られた。特に、アーチェリー場の防矢ネットやグラウンドの照明などの安全面の問題を指摘している施設も多く、活動を継続する上での安全面の確保は喫緊の課題であると思われる。

施設の拡充に関連して、部活動の金銭的支援や評価基準の不明確性について、どのような基準で施設が充実するのか、支援費が算出されて

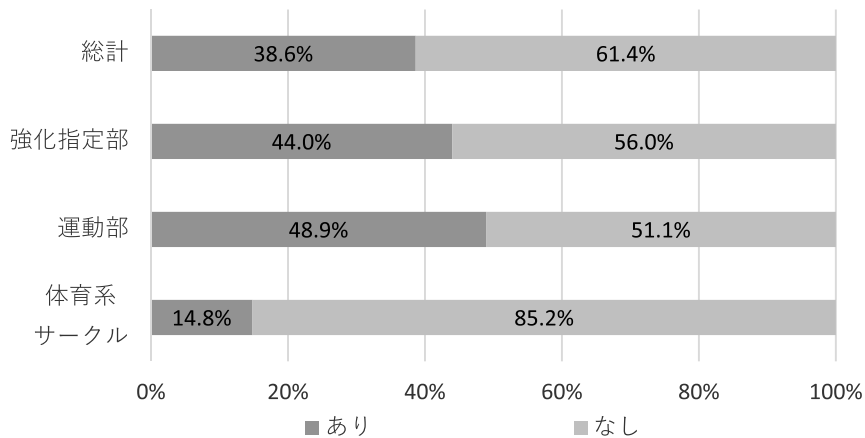


図13 レベルアップのために、大学に望むこと

表7 レベルアップのために、大学に望むこと(頻出語上位10項目)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
練習	23	作る	13
思う	20	大学	11
グラウンド	16	欲しい	11
体育館	14	道場	10
部活	14	特に	10

いるのかを明らかにしていく必要があると思われる。スポーツ施設の維持管理・運営、活動費については、スポーツ庁（2019）が全国公私立大学を対象に行った実態調査である「平成30年大学スポーツの振興に関するアンケート調査」においても大学スポーツが抱える問題として挙げられるなど、スポーツ系学生を抱える全国の大学の課題といえる。

加えて、指導者に対する意見も多く、指導者と学生のトラブルも散見された。技術に偏った指導や勝敗にこだわった指導をしたりすることにより選手がスポーツの楽しさを知ることなく

やめる、スポーツ嫌いにつながるなどの指摘を受け、笹川スポーツ財団（2011）が子どもの運動・スポーツ指導者の意識調査を行うなど、スポーツにおける指導者の重要性に対する社会的な認識も高まっている。指導者を対象とした講習会を開催し、指導技術だけでなくスポーツ系学生との関係性の構築方法などを学ぶ機会を設ける必要があると思われる。

4. 本調査の課題と今後の展望

本調査の課題として、回答者の偏りが挙げられる。強化指定部に所属する学生ほど回答率が

表8 レベルアップのために、大学に望むこと（自由記述を一部抜粋）

区 分	自 由 記 述
環境/公共（40件）	シャワー室、製氷機
	体育館が雨漏りしてるので治してほしいです。
	ランニングマシーンを増やしてほしいです。
環境/個別（41件）	トレーニングルームが体育館の隅にあるだけなので、最新のマシンとトレーニング専用の建物を作って欲しい。
	大学のグラウンドで部活をする際、冬は夕方から真っ暗で何も見えない中走っているのでグラウンドに照明をつけてほしいです。
	グラウンドの環境（ピッチやナイター設備、水道など）がもう少し充実すると、練習時間も多く取る事が可能になると思う。また、ウエイトトレーニングの用具や施設の充実を希望する。
指導者（10件）	安全管理面で射場を強化していただきたいです。矢を扱うとても危険なスポーツなので選手一同、練習を行う上で十分に安全に配慮をして行っています。ですが、射ち方が失敗して矢が的から大きく外れてしまうこともあります。事故が起こる前に早急な対応を希望します。
	空手道部では、道場があるはあるが整った環境であるとは言えない、真ん中に柱があることで、柱にぶつかる正規のコートが作れないので壁に当たるなどして怪我をすることも。なので、専用道場があるととても良いと思う。
	練習場の横にアプローチ練習ができる場所を確保してほしい。
金銭的支援・評価（8件）	ダンスの練習は1101教室の下で行っていますが、授業後の練習になるため、冬はとても寒い中で練習をしています。そのため、練習に集中するためにも、室内で練習できる場所があったらいいと思います。
	監督、コーチの導入（指導してくれる人）
休 暇（2件）	指導者が来年いなくなるので、1人でもいいから欲しい。
	指導者として部活の環境を把握して適度な距離を保ち指導力がある人がいて欲しい。
その他（6件）	遠征費や外部活動の費用を工面してほしい。
	今一度部活動の部費であったり、成績を評価する場を設け、部活をする学生をそれぞれの団体から代表者を選出し、会議をする場を設けてほしい。
	強化指定部以外の部活やサークルのこともしっかり見て、評価してほしい。
	休みがほしい
	オフを増やしてほしいですね。
	もっと、大学の部活全体をホームページにあげ、知ってもらう。
	もっと練習したいです。

高いことから大学のスポーツ環境に強い関心を持っている学生が多いが、運動部や体育系サークルに所属する学生の回答率の低さから、この調査結果によってスポーツ系学生の実態・ニーズを明らかにしたとは考え難い。加えて、社会人スポーツクラブなどの大学外のスポーツ団体に所属している学生や個人でスポーツを実施している学生の動向を明らかにすることができていないことから、更なる調査が必要であると考えられる。

また、本調査では大学満足感やスポーツ環境の満足感に関する調査を行っていない。経年的に大学生の学習・生活実態調査をおこなっているベネッセ教育総合研究所（2018）は、実態調査を行うことのメリットを「学習と生活実態との関連を把握することができる」「大学生の学習行動・意識と生活実態との関連をみることができる」としている。学習時間や生活習慣、大学満足度調査などと併せて調査を行うことで、スポーツ系学生の抱える課題や改善点を明らかにすることができると思われる。

さらに、本調査では11月から12月に1度調査を行ったが、すでに4年生が引退している団体や大きな大会が終了しオフ期間であった団体もあると思われる。対象とする学年や調査時期によりニーズが異なることが推測され、横断的・縦断的な調査を行う必要がある。また、経年的に調査を行うことで、学年や属性による学生の変化を把握することができ、さらに詳細な実態・ニーズを明らかにすることができる。今回挙げられた改善要望がどのように改善され、その結果学生のニーズがどのように変化したかを経年的に調査することで、学生の満足度を高める効果的な取り組みを評価することができる。

全国大学体育連合（2014）は、ニーズ調査に加えスポーツ系団体の活性化に向けて大学としてどのような支援活動を行っているかを調査している。今後は他大学の支援内容を参考に、学生のニーズに対して具体的にどのような支援を行っていくべきかを検討する必要がある。今回

具体的に挙げた学生の要望は、各種目の指導者・コーチへのフィードバック、スポーツ系学生を対象とした講演の開催や研究につながる参考資料として活用できると考えられる。特に、これまでも国際観光学科スポーツツーリズムコースではスポーツの専門的な講義に加え、毎年外部の競技者・指導者を招いての講演・体験会などを実施しているが、参加者である学生のニーズを調査して外部講師を選定してこなかった。今後は対象をスポーツコース以外の学生に拡大し全学的な講演とすること、また学生のニーズを踏まえて競技力向上を目的とした身体的トレーニングや心理的トレーニング、コンディショニングに関する講演を行うことで、スポーツ系学生の満足度を高めることができると考える。

付 記

本調査は、「令和元年度学長裁量経費『NIUS 支援センター』の組織体制およびその業務の確立」の研究助成を受けて行われた。また、同事業の報告書に加筆・修正したものである。

参考文献

- 安達悠子・杉山紗希（2019）「大学生の部活・サークルへの所属と活動に対する意識が学校生活満足度に与える影響」東海学院大学研究年報第4巻、83-89.
- 新井洋介・松井豊（2003）「大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向」筑波大学心理学研究第26巻、95-105.
- ベネッセ教育総合研究所（2013）「第2回大学生の学習・生活実態調査報告書 [2012年]」<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3159>
- ベネッセ教育総合研究所（2018）「第3回大学生の学習・生活実態調査 [2016年]」<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5259>
- 堀洋元（2015）「大学生生活満足感尺度の作成」大妻女子大学人間関係学部紀要第17巻、15-22.
- 井上功一・入口豊・太田順康・吉田雅行（2001）「大学競技スポーツ組織の現状と今後の展望—アメリカ NCAA に焦点を当てて—」教育科学第50巻第1号、193-210.

- 一般社団法人日本私立大学連盟 (2018) 「私立大学 学生生活白書2018」 https://www.shidairen.or.jp/topics_details/id=2040
- 金森史枝・蛭田秀一 (2018) 「大学における正課外活動としての体育会運動部活動の意義—体育会運動部活動を通して何を習得しているのか—」 Nagoya J. Health, Physical Fitness, Sports 第41巻第1号, 45-54.
- 古賀貴子・松本知子・吉田達貞・松永雅弘・磯江由香・尾田美鈴・北浦智恵 (2019) 「評価 IR・研修部門からの現状報告 大学における学びの現状」長崎国際大学教育基盤センター紀要第2巻, 128-141.
- 公益財団法人日本体育協会 (2014) 学校運動部活動指導者の実態に関する調査報告書 <https://www.japan-sports.or.jp/coach/tabid1159.html>
- 熊谷賢哉・宮良俊行・田井健太郎・元嶋菜美香・宮本彩・宮原恵子・徳吉剛・坂本亘 (2019) 「長崎国際大学スポーツブランド“NIUS”醸成に向けた取り組み」体育・スポーツ教育研究第20巻第1号, 58-59.
- 蔵本健太・菊池秀夫 (2006) 「大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究：体育会運動部とスポーツサークル活動参加者の比較」中京大学体育学論叢47巻, 37-48.
- 文部科学省 (2017) 「大学スポーツの振興に関する検討会議～大学スポーツの価値の向上に向けて～」 https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/tou shin/_icsFiles/afidfieldfile/2017/03/10/1383246_1_1.pdf
- 文部科学省 (2020) 「学校基本調査—令和元年度結果の概要—」 https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1419591_00001.htm
- 長崎国際大学 (2015a) 「長崎国際大学強化指定部に関する内規」 <http://www.niu.ac.jp/~ga-s/2-38%20kyoukasiteibu.pdf>
- 長崎国際大学 (2015b) 「長崎国際大学 学生団体昇格内規」 <http://www.niu.ac.jp/~ga-s/2-25gak.pdf>
- 中山文子・藤岡由美子 (2011) 「大学生の食事を主とした生活習慣と精神的健康に関する研究—高校生との比較を通して」松本大学研究紀要第9巻, 139-153.
- 西川大輔・小山貴之・松本恵・竹俣壽郎・野口智博・高橋正則・佐久間智央・小岩瑠 (2014) 「大学スポーツ・アスリートにおけるスポーツ環境に対する満足度について」日本大学文理学部人文科学研究紀要第88巻, 107-118.
- 旺文社教育情報センター (2018) 「29年度「推薦・AO」入学者, 過去最高の“44.3%”！」 <http://eic.obunsha.co.jp/resource/viewpoint-pdf/201801.pdf>
- 小野雄大・友添秀則・根本想 (2017) 「わが国における大学のスポーツ推薦入学試験制度の形成過程に関する研究」体育学研究第62巻第2号, 599-620.
- 坂元昂 (1998) 「大学・高校の多様化と大学入試」高等教育ジャーナル第3巻, 32-37.
- スポーツ庁 (2019) 「平成30年大学スポーツの振興に関するアンケート調査の結果公表について」 https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop09/list/detail/1404336.htm
- 笹川スポーツ財団 (2011) 「子供の運動・スポーツ指導者の意識等に関する調査」 http://www.ssf.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/2011_report_09.pdf
- 高田治樹 (2017) 「大学生サークル集団への入団理由と組織構造との関連」立教大学心理学研究第59巻, 25-40.
- 辻 義人 (2010) 「なぜ大学進学率が50%を超えたのか? —大学進学人口と大学数との関連—」 <https://www.otaru-uc.ac.jp/cgs/esd/esdfd36/>
- 全国大学体育連合 (2014) 「大学・短大における課外スポーツ活動支援に関する調査結果報告書について」 <http://daitairen.or.jp/?p=6358>